

第7回軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議 会議録

1. 開催日時 令和8年3月5日（木） 16時00分～18時00分

2. 会 場 軽井沢町中央公民館 大講堂

3. 出席者 委員：荒井 英治郎委員、本田 秀夫委員、三和 秀平委員、
木村 泰子委員、西郷 孝彦委員、福本 理恵委員、
飯澤 幸世委員、今村 久美委員、西野 博之委員、
岡田 敏之委員、
唐沢 浩一氏（代理）、臼田 瑞希氏（代理）、
上原 浩子委員、山崎 伸一委員、久保 貴史委員
諸星 ひとみ委員、岩崎 ひとみ委員

事務局：宮本 隆教育長、内堀 繁利アドバイザー、岩井 和成課長、
金井 章宏課長補佐、金井 拓也係長、
学校教育係職員 小林 真理、堀本 淳子
軽井沢高校・教育魅力化推進係職員 根津 彩香、桐野 耕介

4. 議 題 （1）第6回軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議
のまとめ
（2）これまでの軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議
のまとめ
（3）学校案内について
（4）これまでの軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議
の総括
（5）その他

5. 傍聴人数 15名

6. 議事内容

● 1. 開 会

【岩井こども教育課長】

それでは定刻となりましたので、ただいまより第7回軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議を開会いたします。

軽井沢町教育委員会こども教育課長の岩井です。

どうぞよろしくお願いいたします。

当初予定しておりました設置準備会議も、本日の7回目で最終となります。

事務局といたしまして、今年度の最終目標としております文部科学省および長野県教育委員会様への設置の届け出に向け、おおよそのめどが立ちました。

これもひとえに、委員の皆様のご協力として、改めて感謝申し上げます。

引き続きよろしくお願いいたします。

それでは、以降は着座にて失礼いたします。

会議に先立ちまして事務局よりお願いがございます。

これまでの会議と同様に、対面及びオンラインの併用とさせていただき、原則として、（事業名にもあるとおり「オープン」＝）「公開」とさせていただきます。

また、傍聴者、メディア等の関係者もおられますが、途中での入退場を含め自由とさせていただきますのであらかじめご了承ください。

この会議は事務局において録音・撮影を行い、後日、議事録の形で町のホームページに掲載させていただきますので、重ねてご了承ください。

なお、現時点で「第6回会議」までの議事録を公開（掲載）しております。

傍聴人の方で、写真等 NG の方は事務局までご連絡ください。

また、恐れ入りますが、今回の会議で令和7年度の会議が最後となりますので、会議終了後、委員の皆様と事務局で写真を撮りたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

● 2. 教育長挨拶

【岩井こども教育課長】

それでは、次第により進めさせていただきます。

初めに、軽井沢町教育委員会 教育長 宮本 隆より、挨拶を申し上げます。

【宮本教育長】

皆さんこんにちは。教育長の宮本でございます。

本日もお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。

また、オンラインでの参加もありがとうございます。

先ほど課長の方からも話しましたが、ほぼ1年前の令和7年3月7日に、この会議の第1回を行いまして、7回の会議を重ねてまいりました。

昨年9月には、『私たちの学校』づくり」軽井沢フォーラムと題して、この軽井沢オープンドスクール設置に向けた機運作りを行ってまいりました。

この間、荒井座長さんをはじめとして、委員の皆様そして関係者の皆様に多くの意見をいただきながら、新たな学校、新たな学び場作りを行ってまいりました。

皆様のご協力に感謝申し上げます。

ありがとうございます。

まだまだ設置には多くの準備が必要ですが、一応ここまでが一つの区切りとなりますので、本日は今までのまとめと、もう一つはご参加いただいている委員の皆様からそれぞれ想いとか期待とか感想とかをいただければと思っております。

来年度も、設置準備会議は続きますけれども、現在のところは少し間が空いて7月12日に『私たちの学校』づくり」軽井沢フォーラム2026を開催したいと思っております。

そして、詳しいことは未定ですが、秋に1回、翌年の冬に1回会議を行い、開校を迎えたいというふうに考えています。

その会議の中で、具体的な姿とか手続き等についてご意見を伺う場を設けたいと考えております。

それでは本日も、様々なところからご意見をいただければと思います。

よろしくお願いいたします。

【岩井こども教育課長】

ありがとうございました。

● 3. 座長挨拶

【岩井こども教育課長】

続きまして、荒井座長より挨拶をお願いいたします。

【荒井座長】

皆さんこんにちは。

座長を拝命しております、信州大学の荒井です。

ご挨拶にありましたとおり、1年前の3月7日に初回会合が開催され、今回で第7回となります。

この間、軽井沢に足を運ばせていただく機会が増えまして、軽井沢中学校や教育支援センターにお邪魔したり、地域の方や保護者の方とも対話をさせていただいてきているところです。ちょうど先ほどまで、軽井沢中学校で職員研修もしておりました。

本日もよろしくお願いします。

以上です。

【岩井こども教育課長】

ありがとうございました。

本日の会議ですが、本城委員、一色委員より欠席のご連絡をいただいております。

なお、藤木委員の代理といたしまして唐沢主幹指導主事様、向井委員の代理といたしまして臼田指導主事様のご出席をいただいております。

また、木村委員におかれましては、オンライン参加となります。

皆様よろしくお願いいたします。

● 4. 議 事

(1) 第6回軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議のまとめ

【岩井こども教育課長】

それでは議題に移ります。

これより先は、設置準備会議要綱第4条第2項により、荒井座長におきまして進行をお願いいたします。

【荒井座長】

では、よろしくお願いします。

次第をご覧ください。

議題は（5）まであります。

最初に（1）ということで前回の第6回会議のまとめの方を事務局から報告をお願いいたします。

【金井軽井沢高校・教育魅力化推進係長】

はい。事務局の金井です。

説明いたします。

よろしくお願いいたします。

お手元の資料右上【資料1】、ページ数1ページをお願いいたします。

第6回軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議のまとめということで説明いたします。

日時：令和8年1月28日（水）

会場：中央公民館の大講堂

出席者、欠席者、事務局、そして議題につきましては、お手元の資料の通りでございます。
当日の資料といたしまして、記載の通りの資料を提示いたしました。

会議の次第につきまして、（1）第5回軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議のまとめ、（2）『私たちの学校』づくり」ワークショップ・実践について（中間報告）、（3）スクールコンセプトについて。

次のページをお願いいたします。

下段3ページになります。

（4）設置場所について、（5）スクールデザインについて、（6）学校案内について、（7）申請書類の様式について、そして（8）その他ということで会議を行いました。

5その他につきましては、特になしということで資料に記載の通りでございます。
説明は以上となります。

【荒井座長】

ありがとうございました。

ただいま、【資料1】について説明いただきました。

ご確認いただき、ご意見ください

よろしいでしょうか。

オンライン参加の方もよろしいでしょうか。

●（２）これまでの軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議のまとめ

【荒井座長】

それでは、議題の（２）に移ります。

この間、６回にわたる会議を行ってきましたけれども、これまでの設置準備会議のまとめです。

【資料２】を使って事務局から説明をお願いいたします。

【宮本教育長】

はい、それではよろしくお願いします。

４ページの【資料２－１】からですけれども、まず初めに軽井沢オープンドアスクールのスクールコンセプトについてということで、それに関わるご意見とかご質問が、８ページまであり、今までの会議の中でいただいたものを全て分類して載せてあります。

その中で特に、前回の６回目会議のご意見について、赤字で記載しています。その部分だけ簡単に、ご説明させていただければと思います。

５ページに、４つ赤い枠があります。

その１番上のところは、要は、欠席が多い児童生徒だけじゃなくて、登校できているけど苦しい思いをしている児童生徒も通いたいと思うのではないかというご意見もありました。

それに対して事務局の方としては、元々もちろん不登校の対応のための学校なんですけれども、今『私たちの学校』づくりということで、既存の学校についても大きな改革をしていますので、そういった苦しさがある子がいればそういったことを軽減したり、そういった話を聞きたいというふうに考えております。

２つ目で、今度は具体的に通ってくる対象の生徒について、現在登校できていない、苦しい思いをしている子が優先されるべきなのではないかとか、あるいは欠席日数が多い児童生徒の受け入れを優先すべきではないかというご意見です。

具体的には今後、生徒と対面でお話したり説明したりする中で、どんな子どもたちが優先されるのかということについて、個別に判断していきたいと思っております。

そして、１番下ですけれども、こういった子どもたち（既存の学校へ通えていない子ども）がいる中で、（オープンドアスクールの）理念に既存校も近づけていけると良いですねとご意見をいただきました。

私達もそのつもりでしたので、『私たちの学校』づくりとして進めていきたいという大きな２本柱に入れています。

それでは次の６ページをお願いします。

赤い部分ですけれども、皆さんからいただいた意見として、夜間中学も町内在住者をまずは優先させて受け入れたほうがいいのかということと、対象生徒について夜間中学だけではなく学びの多様化学校も広域化を想定するとありがたいということでご意見いただいています。

事務局として、学びの多様化学校コースは、まずは町内在住者を対象としていきたいとしております。

そして夜間中学については、広域化を考えています。

そして、学齢期の子どもたちも夜間中学コースも活用することを想定しております。

そして、上から3つ目ですけれども、就学援助というのが市町村によって違うので、そういった覚書を締結するということが必要だというお話がありました。

今後、事務局としての対応ですけれども、県教委の皆さんともご相談しながら、他市町村の覚書も取り込み、参考にしながら、その部分についてどうするかということを今後、該当の市町村と協議していきたいと思っています。

それと、4つ目ですけれども、近隣市町村はどこですかというご質問で、その右側にありますように、御代田町、佐久市、小諸市、立科町の皆さんにはお声掛けをしたいというふうに考えております。

5つ目ですけれども、夜間中学の対象者の掘り起こしを今後どうしますかということで、町内の広報も引き続き行います。

近隣市町村とは、まだコンタクトについてしっかり動いていませんけれども、できるだけ早い段階で広報を行えるようにしていきたいと考えております。

それでは、次の7ページをご覧ください。

設置場所について、下の方に赤い部分、前回いただいたご意見が2つあります。

皆さんから、高校に設置ということに抵抗がある子どもたちがいるので、学校ぽくないような印象を与えることが大事じゃないかというお話をいただきました。

私達もそのように考えておりますので、そのためにはどういうことをすればいいのかということを、開校後も子どもたちの意見を反映しながら改修を行っていききたいと思っています。

それとその下に、現在両方のコースを合わせて45名の定員なんですが、今後どのくらいまで増やせますかという話で、やはり今の校舎ではそのくらいが限界なのではないかというふうに考えております。

この後は、今までいただいた意見ですので、割愛させていただきます。

11 ページにスクールデザインに関わるご意見がありまして、赤い字で書かれているところがございます。

今日は資料ありませんけれども、町内の施設で学びの多様化学校の子どもたちが、昼間といいますか、(学校は)10時半に開くので、それまでに活用できる施設はどんなところかということを一覧にしたんですけれども、それに対して既存学校の子どもたちも使えるかというご質問がありまして、もちろんこれは利用できます。

続いて、めくっていただいて12ページの下の方の4つですけれども、学校規模に関しては、定員が1学級10人程度で十分なのかというお話がありました。

軽井沢オープンドアスクールは全ての不登校の方を対象にしてるんですけど、要は子どもたちの選択肢の1つですので、その他の子どもたちをどうするかという話のところでは、既存校の魅力化とか、オープンドア以外のところで考えていきたいという風に思っております。

それとその後、転入学時期なんですけれども、一応4月及び10月としていますが、もっと柔軟に、そういう希望があったときに転入学できればいいのではないかというご意見がありました。

状況を見ながら、必要に応じて検討をしていきたいというふうに思っております。

その後、3番目ですが、転入学の前の学校体験の時期について、日数は本人が納得できるまで実施するのが望ましいというご意見をいただきました。

確かにその通りで、状況を見ながら個別にも体験していったり、あるいは全体の企画だけで終わらないようにしたいと思っています。

1番下の、夜間中学の修業年限について、何年で教育課程を修了できるかというのはその人によって違うので、柔軟に対応をお願いしますという意見をいただきました。

これは、一応定員があり、長い期間を認めていると新たな人を迎え入れるということがなかなかできない側面もありますので、そういうことも考えながら、可能な範囲で柔軟に対応していきたいと思っています。

その次の13ページ【資料2-3】が、スクールコンセプトの最終案なんですけれども、そのリード文に二つ黒点があります。

1つ目はオープンドアスクールを作るということ。

2つ目は、要は既存の学校の魅力化というものを最初から提示していたんですけれども、議論が進む中で、軽井沢町教育委員会としてこの行為を総称する言葉・スローガンみたいなものを作った方がいいのではないかとということで、オープンドアスクールに関するアンケートの最初のリードで使った『私たちの学校』づくりという言葉掲げ、この大きなスローガンで、この2本柱を町の教育委員会としてやっていくという方針を作りました。

そして、2 対象生徒のところは、3つ黒点があります。

1つ目は、不登校の子どもたちを対象とした学びの多様化学校なんですけれども、とりあえず最初の段階では軽井沢中学校在籍者を想定しています。

その下の2つの黒点は、夜間中学についてで、軽井沢町だけではなく、先ほど申しあげました近隣市町村在住者も想定しています。

そして、3 設置場所に関しては、軽井沢高校の北校舎を考えているということでもあります。

続けてご説明してもよろしいでしょうか。

続けて、14ページ【資料2-4】ですが、軽井沢オープンドアスクールのスクールデザインです。

1 日課、2 教育課程、3 空間デザインに関してはその後ろの15ページ以降にあります。

15ページが日課になります。

これは、一応学校として大枠で作った日課でありますので、子どもたちがどう選んでいくのか、場合によって、このままの授業時間割でやる子もいれば、そうではない子どももいるという状況を想定しております。

続いて、16 ページ【資料 2－6】が教育課程です。

これについても、学びの多様化学校コースは 770 時間、そして夜間中学コースは 700 時間と
いうことで作成しています。

それと、新たな学びの活動あるいは教科というのが、「とことんクエストタイム」という総
合的な学習の時間に当たる時間とか、削減の部分を「ヒューマンタイム」、「ネイチャータイム」、
「表現タイム」と名づけております。

そして 17 ページは、オープンドアスクールの空間デザインというところで、このままになる
わけではありませんし、予算の関係もありますので初年度に全部できるかわかりませんが、
おいおい子どもたちも意見を聞きながらこういう空間にしていきたい、作りあげていき
たいというふうに考えております。

ここまでは、これまで出してきた資料とそんなには変わらないです。

14 ページの【資料 2－4】に戻ってください。

先ほど少しお話しましたが、4 学校規模、5 転入学時期、6 夜間中学コースの修業年
限を記載しています。

そして 7 校名ということで、正式な場合にはここに軽井沢町立がつくかと思いますが、(仮
称)ではなく、軽井沢オープンドアスクールという名称を使っていきたいというふうに考えて
おります。

それでは、まずは(2)これまでの軽井沢オープンドアスクール(仮称)設置準備会議のま
とめについて、ご説明いたしました。

以上です。

【荒井座長】

ありがとうございました。

【資料 2－1】から【資料 2－7】まで、これまでの議論をまとめていただいたものとなり
ます。

いかがでしょうか。

【A 委員】

はい。

今、資料の説明をいただいて、とても素敵な学校ができそうだなと、すごく楽しみにしてい
ます。

前回私がお願いしていた夜間中学の修学年限も、「原則」というのを入れていただいて、6
年を超えても在籍したいという希望にも、可能な範囲で柔軟に対応するという文言を入れてい
ただいたこと、ありがたいと思っています。

ただもう 1 点、これも前回お話をさせていただいたんですが、人が学びたいという気持ちとか
学ぶ権利というのに市町の境とか県境は関係ないんです。

例えば私が関わった三豊市は、香川県内のみならず徳島県からも来ていまして、負担金など
に関する覚書を県教委が中心になって調整していただいているんです。

確かに軽井沢町立ですから、軽井沢の子たちを優先するのはその通りだと思うんですけど

も、余裕があるのならば近隣の市町とか、あるいはもう県をまたいででも、希望があれば入ってもらえるような仕組み作りを考えていただければありがたいなと思います。

【荒井座長】

はい、ありがとうございました。

【B 委員】

はい。よろしくお願いします。

【資料 2－2】と【資料 2－5】に関して、簡単な質問をさせてください。

【資料 2－2】スクールデザイン、授業について（の記載がありますが）、心理カウンセラーではなく、カリキュラムや時間割の授業の取り方を相談できるような授業の取り方の相談できる常駐のカウンセラーやソーシャルワーカーみたいな人がいるのでしょうか。

どういうふうに授業を取っていいかということが、わかるようでわからないかなと感じました。

これで帰ってしまっているのか、これも取った方がいいのか等。

この後の学校案内に出てきますが、ここで帰ってしまって別に問題ないのかななどを相談できる人というのは、どこかになにかしらの形でいるのか、担任の先生なのかというのが知りたいです。

また、【資料 2－5】をみると教職員の勤務時間が、例えば早番だと 10 時 20 分から 18 時 50 分までなんです。

10 時 30 分からマイタイムが始まっていて、早番が 18 時 50 分までということは、4 時間目が終わって 10 分後には退勤になる。

僕はずっと不登校の子どもたちのフリースペースをやってきて、一番大事なのは振り返りの時間なんです。

子どもたちの情報共有や、今日〇〇ちゃんが泣いていたとか、あの子すごく苦しそうだったとか、すごく喜んでいたりとか。

楽しかったことや大変だったことを職員同士で振り返る時間は、果たしてこの勤務体系の中にあるのだろうかというのが非常に心配になりました。

感情労働と僕らは呼んでいますが、心も体も疲れることがあるので、その日のうちに共有して、今日起きたことを職員同士で吐き出し合えたり、情報共有できるのが重要です。

この勤務体系だと、それが厳しいのではないかと気になりました。

それに付随して、この学校が本当に面白くなるには、やはり教員の質の確保というのが大切だと思います。

その研修はどういう形で職員研修をしていこうという方向なのかが気になりました。

あと、休み時間が特に記載してなくて、40 分の授業の中で 35 分ぐらい授業があって、残りの 5 分間で移動するというようなことなのかという確認をもう 1 度させていただけたらと思いました。

お願いいたします。

【荒井座長】

はい。ありがとうございます。

【資料2－2】と【資料2－5】に関わって4点ほどご質問いただいたかと思いますが、事務局のお考えをお願いしますでしょうか。

【宮本教育長】

はい。

まずご質問いただいた、出る授業をどうするかとかあなたにとってこれが大事なんだという相談についてお答えします。

基本的には正規の先生が来ますが、先生が人数的に何人来るのかということはまだ言えないですし、定数だとかはこれからご相談するんですけども、担任はこの先生ということが決まっていますし、クラスがあるわけではなく、異年齢の集団の学びになります。

（生徒は）多くても学びの多様化学校コースで30人、多分1年目はそんなにはないと思いますが、そのくらいですので、学年というものはないと考えております。

誰が担任かということを決めてもいいし、決めなくてもいい。先生と子どもたちの出会いのなかでどうしていくかということになると思いますけれども、先生がそれだけ（の人数）しかいないので、要は全部の先生で全部の子どもたちを見られるという状況であると考えています。

ただ、先生だけではなくて、町にはスクールサポーターという公認心理士あるいは臨床心理士の資格を持った職員が4人いますので、その心理士が、この学校（軽井沢オープンドスクール）にどのくらいいるのかということはまだ決めていませんけれども、例えば人は違いますが、5日のうち4日間はいるとか、そういう形での相談体制も整えていきます。

従って、そういう相談をする人はいますし、先生にも相談できるというのがまず1点目です。

それともう1つ、先生同士の子どもたちの情報交換なんですけど、確かにとても大事で、子どもたちの現状とかというのは大事だとは考えています。

（教員同士）一緒にいる時間もありますけれども、それ以外のところでは、今、実は本町の小学校では、子どもたちの様子とか保護者との対応を全部データに打ち込んでいまして、そのデータが全部の先生で共有できるようになっています。

例えば、次の年に担任になった先生は、〇〇さんと打つと（それまでの）全ての対応が出てくるようになっています。

こういう形で、去年のことは知りませんということにならないようにしていますので、そういうシステムを使うという点もあるというのが1つです。

それと、振り返る時間も大事で、Face To Face が大事なので、そういった時間を確保するという点では、毎日シフトが変わるわけではありませんけれども、できるだけそういう共有する時間を確保して、そういったところでやっていく方法もあるのではないかと考えています。

それと、先生たちの研修なんですけれども、これもやはり大きな課題です。

何もしなければ、来年の4月に内示を受けた先生が急に来ることになってしまいますので、現在県の方とも協議しながら、できれば事前に研修をやりたいと考えています。

ただこれが難しいのは、現役の学校（異動前の学校）がありますし、研修権は軽井沢町にありませんので、どうやってそれを確保していくかが課題であります。

それとこの時間割ですけれども、子どもたちはこの時間通りに動くかといえば動かない子もいるのではないかと思いますので、時間割は、学校としてはあるんですが、子どもたちがその時間通りに動くかということは別問題だというふうに考えています。

子どもの学習するスペースあるいはどこでやるかどんなふうにやるのかというのは子どもたちにかかっているという部分がありますので、あまりこの時間には捕らわれたいと考えています。

【B委員】

ありがとうございます。

ネット上というか、クラウドに打ち込んで、誰でもいつでも共有できるようにということで情報共有を図るというのはわかりました。

ただ、せめてどこか週1度でもFace To Faceで先生同士が語り合える時間を確保するとかを事前に用意された方がいいのではないかと思います。

僕らは毎日やるんですけど、最低でも週1回何時間か時間を取って、いろんな課題を抱えたり困難な課題を抱えた子たちの支援方針を共有し合う時間みたいなのがあった方が、より豊かな教育ができるのではないかと老婆心ながら思いました。

もしどこかに検討できるならば、そういう時間を事前に用意して、ここ（軽井沢オープンドアスクール）を使われる保護者や本人たちにこの時間は先生たち授業がなくて、会議の時間なんだという共有をして、（そういった時間を）確保された方がいいかなというのは、現場をやってきた人間の感覚としてはありますということだけお伝えしておけたらと思います。

ありがとうございました。

【荒井座長】

はい。

ありがとうございました。

座長としてぜひお願いしたいことがあります。

学年歴としては1年後に見えてくることになるであろうということと、軽井沢中学校との伝統も考慮する必要があると思いますが、ぜひスタッフ研修をきちんと行うため、着任後、学校がいつスタートするのか異動後の教員にとって1日違うだけでも大きく異なると思いますので、ぜひ考慮いただきたいです。

お願いします。

他にはいかがでしょうか。

はい、では【C委員】お願いします。

【C委員】

失礼します。

オンラインでの支援について、まだあまり情報が出てないと思うのですが、県の方でメタバースの支援がこれから始まるということで動いていると思うので、もし可能であれば、まだ情

報があまり出ていないと思うので今の段階で検討というのは難しいかもしれませんが、可能性として何かそちらの方に町で協力して、手を挙げて入っていくということもご検討いただきたいなというふうに思っています。

また、学習に関しては町の方にいろいろノウハウがあると思うのでそちらで補えると思いますが、居場所的なものに関しては、やはり何か別の場所が必要かなというふうに思っていて、たぶん町で作るのは難しいと思うので、県なんかと一緒にやっていくといった動きを取ることもありだと思うので、ちょっとまだ情報がないので今の段階では（手を）あげられないかもしれませんが、ご検討いただけたら嬉しいなというふうに思っています。

以上です。

【荒井座長】

はい。ありがとうございます。

今、【C委員】からご指摘いただいたように長野県では予算上、次年度メタバースを活用した不登校支援に踏み出すことも予定しているようです。

ぜひ、もしそういう機会がありましたら軽井沢町として情報を共有していただいて、コミットいただけたらと思います。

ありがとうございます。

他には、【資料2】を中心にいかがでしょうか。

はい、では【D委員】お願いします。

【D委員】

はい。拝見させていただきました。

先ほど【A委員】がおっしゃった、在籍者の対象を軽井沢中に絞るというところについてですが、私は以前からお伝えしていた通り、この学校は10人かける3学年という大変限られた枠なので、やはりとても人気校になることが想定できると思います。

そうするとやはり、ここにアクセスできる全県の感度の高い家庭の方というよりは、アウトリーチしてでもまずは軽井沢町の中で困っていて、ここにアクセスできない人を受け入れるんだという気概で、この10人かける3学年をまずはちゃんと受け入れていただきたいと思います。

できればこの軽井沢オープンダスクールにもあげてこれられないような福祉的なケアが必要な方こそここに迎える必要があると思うので、まずはそういう対象にした方が、私はいいのかなと思っています。

ただ、例えば6月とか7月になって、どうしても空きがあることがはっきりしたら、追加募集みたいな形で近隣自治体に開くというのもあるかなと思うんですけども、私は基本的には福祉を重点に置いた場であるという観点にするならば、やはりまずは対象者をできるだけ絞って、福祉の部局へのアウトリーチも含めてやっていくような、そういう場所になっていくというのが本当に困っている方々にとって手が届く存在になっていくのかなと思います。

ごめんなさい。今軽井沢町には何人の不登校がいますか。

何人が今軽井沢で不登校になっているのか、数字が頭に入っていないので前回もお聞きしたのですが、確か10人かける3学年よりいたような気がします。

50 人いっちゃるということなんですね。

軽井沢町の中学生で不登校になっている子が 50 人いるということは、20 人の子はここに来られないということになります。

12 ページに書いてある学校規模のところで、「オープンダスクールは生徒が自分に合った学びをするための選択肢の 1 つである」というふうな明記がされていますけれども、もちろんこのオープンダスクールを磨き込むということが教育委員会の大きな使命であるんですけれども、やはりここに来られない子をどうするかというところも重要であると思います。

これは（選択肢の）1 つであって、民間のフリースペースやフリースクールとも積極的に連携しながらやっていくことも含めてオープンダスクールの概念で、軽井沢で学校に通えていない子たちが居場所と学びに繋がるということを、そういうスコープでこのオープンダというコンセプトを捉えていけるようなオープンダスクールになっていった方がいいかなと思います。

もちろん、軽井沢中学校の『私たちの学校』づくり」プランで、そもそも学校が良くなったらいいいところもあるんですが、やはりその間のところには抜け落ちる子がいると思うので、私はそこが 1 番気になりますし、そこを意識して取り掛からないといけないと思います。

行けない子たちじゃなくて、軽井沢オープンダスクールに行けている子たちばかりがニュースになって、うちはいけなかったという失望感がより深まるのではないかとこのところを懸念しています。

なので、来られない子たちも含めてオープンダスクールであるというコンセプトを実現していくということも忘れずに進めていくということをお願いしたいしたいと思います。

以上です。

【荒井座長】

はい。

貴重な意見をありがとうございました。

ご指摘の通り、オープンダスクールの検討をしているわけですが、理念としては、この学校のみならず、既存の学校そして教育支援センター、あるいは近隣のフリースクール、校内教育支援センターも含めて、『私たちの学校』づくりを進めていく点が重要かと思うので、ぜひ今いただいたご意見を受けとめていただきたいと思いますと感じております。

事務局の方から、今の意見について、いかがでしょうか。

【宮本教育長】

はい。

確かに、【D 委員】がおっしゃる通り、そういったところから抜け落ちる子がいないようにすることが大事ですので、中学校には校内教育支援センターもありますし、そういったところとか、様々な形でその子どもたちが学びに繋がっているようにはしたいというふうに考えております。

『私たちの学校』づくり」とは基本的に、学校の文化や先生たちの考え方、その意識みたいなものについて、別に先生が悪いというわけではないんですが、良かれと思ってやっている

ことが良くないという側面もあるので、そういう学校文化を変えていかなければいけないということで、そこに取り掛かり始めていますということです。

【荒井座長】

はい。ありがとうございました。

定員を満たない場合はどうするかという危機管理と、定員を超過した場合にどのような判断を教育行政としてやっておくべきなのかという点も考えておく必要があるかと思います。

他には、【資料2】に関していかがでしょうか。

【E委員】

【E委員】です。失礼します。

非常に良い学校になりそうだなというところで今まで議論が進んできたことをキャッチアップさせていただきながら拝見していたんですけども、【B委員】がおっしゃられていた教員研修のところが私もすごく心配だなと思っております。

私も鎌倉の由比ガ浜中学校の設立に関わらせていただきましたが、鎌倉も新しい教科を入れていくときに、5年間のウルトラプロジェクトを通じて、教育委員会さん始め、現場の先生方も数名でしたけれども見に来られる方に来ていただきながら、どういう文化の中でどんな手触りで子どもたちに接していくのかというのを5年間かけて理念を共有してきたというところがあったと思うのです。

人事を受けて、明日から『私たちの学校』づくりということで、新しい学校でやっていきたいと思いますと言われたときの先生方の不安感を考えると、今傍聴されている中には教員の先生がいらっしゃらないのではないかと考えておりますが、そういうことを考えるとやはり先生方に、このオープンドアスクールで目指していこうとしていること自体が軽井沢の未来の学校を作るということだと知っていただく必要があると思います。

理念だけではなく実践として、どんなスキルやどんな心構えで接していただくか、子どもたちを包摂できて初めてこの学校はその理念を実現していくことができるんだということを、先生方自体の心理的安全性が高い状態で、当日ではなく、始まってからの研修以外の形で、事前に何かそういった機会を設けていく必要があるのかなと思いました。

これから詰めていくことになると思うのですが、教育課程の「とことんクエスト」、「ヒューマンタイム」、「ネイチャータイム」等も、非常に魅力的なものになるという期待感でいっぱいです。

試行錯誤を行う上で、これをどういうふうにしていくのかというイメージが事前に持てる状態で子どもたちと一緒に学び合うと、先生方も試行錯誤しながら挑戦していけると思いますし、そのための最低限の事前共有があってしかるべきのかなと思いますので、そんな機会が設けられるのであれば、お願いしたいなと思った次第です。

【荒井座長】

貴重なご意見をありがとうございました。

16 ページを中心に、様々な魅力的な活動や教科があるわけですが、これまで軽井沢町として、外部関係者と協力しながら、教育課程の魅力化に取り組まれてきた部分もあるので

はないかと思います。

もし、そういった側面があればご紹介ください。

本日、配付資料としてもありますけれど、何か実績等がありますでしょうか。

【宮本教育長】

16 ページの一番下に「表現タイム」とあります。

この「表現」という言葉なんですけど、軽井沢町は一昨年から表現コミュニケーション教育というものを行っています。

実際には東部小学校がもう 1 年前から、県の事業に手を挙げてやっています。

表現コミュニケーションというのは、演劇の手法を使った学びで、そのファシリテーターの皆さんが軽井沢町や近隣市町にいたり、委託できる会社が町内にあったりしたので、昨年は小学校 5 年生に年間 5 回、2 時間続きの 10 時間、そして今年は 5 年生 6 年生に、6 回 12 時間の授業を行いました。

この取り組みは、3 月 10 日に文部科学省の「教育委員会月報」に載りますので、そこに詳しく載せますけれども、表現という正解不正解のない自由な空間で活動をしていて生き生きしている、これをやったら怒られるかなという不安やオドオド感などが無い空間で子どもたちが学んでいます。

今年小学校 3 校でやっていますが、その子どもたちが中学校に入って、(来年度は) 中学校 1 年生でもその活動をしていくと、さらに(将来的には) 小学 4 年生へも拡大していくというように考えています。

このように心理的安全性を学校の中で担保することによって、教科の活動や学校の中の特別活動、学級活動、児童会活動も活発になっています。

実際にそういうことが起こっています。

そういったことを今実際にやっていますので、子どもたちの心理的安全性を軽井沢オープンドアスクールだけではなく、既存の学校でもきちんと確保していくという方向性での 1 つの手法ではないかなと思っています。

1 つの特徴的な側面です。

【荒井座長】

ありがとうございました。

今お話しいただいた「表現コミュニケーション」については、今年度長野県で行われた不登校のお子さんを対象としたイベントがありまして、そこでも登壇いただきました。

ぜひそういう連携関係を深めていただきたいと思います。

では、【B 委員】をお願いします。

【B 委員】

はい。

今、教育長がおっしゃったかどうか私には十分理解できなかった部分があるのですが、この取り組みをより本当に面白くするのは、学校教育だけで完結するのではなく、地域社会や社会教育の力というか、地域にお住まいの方たちのスキルや、いろんな力を生かしていくことだと

思います。

ここにある「ヒューマンタイム」、「ネイチャータイム」、「表現タイム」、「とことんクエスト」へ社会教育的にいろんな地域の人たちの力を生かし、そういった学校作りになっていったらいいなと常々思っています。

そういう方向で考えていいのか、それとも学校の中だけで完結するということなのかというところだけ確認させていただいてもよろしいでしょうか。

【宮本教育長】

はい。

本日、皆さんにお配りした資料でこちらのリーフレットがあります。

教育一貫独自プログラムです。

こちらをご覧くださいますと、1 ページ目には「こぶし教育」ということで、軽井沢町の教育に関する方向性とか趣旨が書いてあります。

開いていただきますと真ん中のところに、概念図を書いています。

これは昨年作ったものなのですが、真ん中に「軽井沢学」とあります。

軽井沢町というのは他の市町村と比べますと東京に在住しながら軽井沢町にいる方もいらっしゃるし、町の豊かな自然とか歴史とか文化とか人材など、非常にいろんな方がいらっしゃいますので、そういった人たちと学びましょう、そういった教育資源を活用して学校教育をしていきたいと思いますということを掲げています。

学校教育だけではなく、先ほど【B 委員】からもありましたように、社会教育の側面もありますが、こういった理念というのが元々軽井沢町にはありますので、もちろん軽井沢オープンスクールも既存の学校よりももっと大きなそういった理念を活用していくものというふうに考えていますし、学校の敷地の中だけではなく、外とかそういったものを活用したり、そういった人たちの繋がりネットワークといったものを利用していきたいという風に考えています。

【荒井座長】

【B 委員】、よろしいでしょうか。

では、【A 委員】お願いします。

【A 委員】

先月 2 月に、【E 委員】に協力をお願いして、三重県版 U L T L A（ウルトラ）を実施していただきました。

その U L T L A を振り返ってみると、ここに書いてある「とことんクエストタイム」、「ヒューマンタイム」、「ネイチャータイム」、「表現タイム」を全て網羅できているのではないかと思います。

先ほど、教員研修のこともおっしゃっていたんですが、(U L T L A では) まず教員研修をやっていたくんです。

これも、教員の意識改革に繋がっていきます。

それと、生徒のアセスメントも、生徒自身が自分自身の取り扱い説明書をつくるということで、自分の得意不得意も振り返ることができるんです。

こういういろんな体験学習において、このパンフレットにあるような、地域の人材・リソースを活用した中でいろんな体験をしてもらうことによって、振り返ったり、その振り返りを自分なりの表現で自己省察まで持っていけるっていうことができたと思います。

三重県は1日だけのプログラムだったんですが、来年はもうフルスペックでやりたいと校長も言っています。

2日か2日半でやるということなんです。

せっかく【E委員】がいるので、またこういう内容をより充実させるために、今後相談されていったらいいのではないかなと感じました。

以上です。

【荒井座長】

他には、この【資料2】についていかがでしょうか。

はい、では【F委員】お願いします。

【F委員】

すみません。【F委員】です。

内容は、とても良いと思って拝見しました。

先ほどどなたかもおっしゃっていましたが、結局やはりこういう教育システムの中で箱物の枠組み作ると、その中で何をやるかということは充実するんです。

しかし、外とどう繋がるのかということを仕組みの中にきちんと入れておかないと、勤めている先生方は中をどう充実させるかということに一生懸命になると思うんです。

そうすると、結局そこに馴染めた子どもさんたちはすごく満足するかも知れません。1学年10人、3学年だと30人の子どもさんはすごく満足するかもしれない。

だけど、ひょっとすると、ちょっとなじまないお子さんが出てきたり、それから入りたいけど入れないお子さんが出てきたりしたときに、この学校を作ってそれで「はい、スタート」とやっているだけだと、結局ニーズの全体には幅広く対応できなくなってしまうと思うんです。

こういう従来の学校の枠組みからちょっと派生して作られるシステムには、基本的にはその社会の他の仕組みとのインターフェース的な役割を持たせるべきじゃないかと思うんです。

例えば不登校のお子さんの中にはかなり発達障害のお子さんが混じっています。発達障害で不登校のお子さんは結構フリースペースを活用していたり、高校だと通信制へ行ったりしますが、そういう公立教育の枠組みに入っていないところと何らかの接点を持つような仕組みを作っておくといいと思います。

ソーシャルワーカーの役割の人や、あるいはコーディネーターの役割の人、そういった人たちを何らかの外との接点・繋ぎ役という形で、仕組みの図の中に入れておくといいんじゃないかなと思います。

これは私が発達障害の子どもさんの地域支援体制のシステム作りをずっとやっていて感じ

たことですが、福祉や母子保健のところは結構仕組み作りのところで繋ぎの位置づけがはっきり書けるんです。

ところが学校は、学校の仕組みの中で完結しているように見えてしまうんですが、逆に学校のシステムからちょっと弾かれかけてしまった子どもさんに対して外とどう繋ぐかという仕組みが不明瞭なので、そこはいつも苦労するところなんです。

まさにこのオープンドアスクールを利用するお子さん方というのは、ちょうどその狭間に入るお子さん方が大勢いて、ここに馴染める人もいるけど馴染めない人もいるかもしれないんです。

そういうときに、外のフリースクールなどとどう繋ぐのかとか、そういったことも含めて考えて案を立てるともっと良いものになるのかなというふうに思いました。

以上です。

【荒井座長】

ありがとうございます。

事務局としてはいかがでしょうか。

【宮本教育長】

はい。町としてちょうど、福祉と教育の間に入る「こども家庭センター」を4月から設置していく予定です。

そこと協力しながらやっていきますが、そこには様々な保健師や、SSW（スクールソーシャルワーカー）もいますので、そういったところと連携をしながらやっていきたいと考えています。

もちろん、軽井沢オープンドアスクールだけではなくて、既存の学校も同様に考えております。

【荒井座長】

はい。ありがとうございました。

他にはいかがでしょうか。

では、【G委員】をお願いします。

【G委員】

先ほどから、何名かの方が教員研修のお話を出していました。

校長としての経験からすると、着席で行う事前研修も必要ですが、オン・ザ・ジョブ・トレーニングというか、実際に目の前に子どもがいる状況での研修がとても大切で、やはり組織の中にアドバイスができたり、そういう経験を持っている教員がいたり、そういう人が必要なんです。困ったスタッフがいたときに、その方に相談ができるような環境が。

教員配置は県の方でされるので、どのような方がこの学校に配置されるか、事前にはわからないわけですね。

去年NHKで放映された引地台中学校（神奈川県にある学びの多様化学校）の例でいうと、教育長が、そういうことへ造詣の深い経験豊かな方を最初集めたそうです。

今は異動して、全員じゃないみたいですが、まずは（そういった方を）集めてうまくスター

トし、その後は希望性ということでそういう教育をしてみたいという教員を集めて、今運営しているそうです。

何かそういうスタートのところで、単に事前に勉強をして、例えば発達障害について勉強したとか、不登校について勉強したとか、そういうことではなくて、やりながら様々なスキルを身に付けていくというような仕組みができるかできないかはわかりませんが、そういった仕組みができるといいなと思います。

意見です。以上です。

【荒井座長】

はい。ありがとうございます。

人事に関わることはありませんが、県教育委員会の方にお聞きしたいと思います。

【H委員】

お願いします。

【H委員】と申します。

今のお話に関連するところで言いますと、先日いただいたスクールコンセプトをもとに、県内全校長会で軽井沢オープンドアスクールについての紹介をさせていただいております。

その中で、教員側の人事異動がございますので、ぜひ志があり、この学校の理念にも合致する先生を求めているということで、興味のある先生はぜひ手を挙げていただきたいということを行っているところであります。

現在、そこまでの状況です。

【荒井座長】

はい。ありがとうございました。

確か、個別テーマの募集もありましたよね。

事務局の方で、ご紹介可能でしょうか。

【宮本教育長】

人事異動に関して、全県の各中学校あるいは各教育委員会で力を入れている教育内容について、こういう先生が欲しいという募集を（長野県教育委員会は）出しています。

来年からはそちらにも軽井沢オープンドアスクールを入れるということで（町としては）考えております。

今、【H委員】に言っていたのは、人事異動が来年のことなので、今年から県の方にご協力いただいて広報しているという状況です。

【荒井座長】

はい。ありがとうございました。

他にはいかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

では、【資料2】を使った、これまでのまとめについては一旦ここで区切りをと思っています。

●（３）学校案内について

【荒井座長】

では、次第の（３）学校案内について、事務局から説明をお願いいたします。

【宮本教育長】

はい。

18 ページからとなります。

学校案内は、前回第 6 回会議で初めて示したものですので、18 ページの意見はすべて第 6 回会議でいただいた意見です。

細かくご説明すると時間がないので割愛させていただいて、19 ページからの中身について、前回お示しした内容と違うところだけをお話させていただければと思います。

全体のレイアウトやデザインは、今後まだまだブラッシュアップして、業者に出したり等色々なことを考えていきたいと思っています。

20 ページを開いてください。

学びの多様化学校コースの枠に風船みたいな吹き出しが 4 つありまして、そこに赤字で、「1 日の過ごし方を自分で考えて決めたい」というところがあります。

前は、「みんなと同じように成績もつけてほしい」と成績について書いていたんですが、それは色々な解釈ができてしまうということでご意見いただきまして、内容を変えました。

23 ページ Q & A の「Q 8：費用」ですが、基本的にはもちろん町立ですので無料です。

「その他に、校外活動や学習等で必要となる場合には」ということで記載しまして、場合によってそういったことがあった場合にはお金をいただくことがあると表現を変えました。

24 ページは特段大きく変わっていませんが、夜間中学のところで、一応学年 5 人程度、全体で 15 人程度というのを書き加えました。

それともう 1 つ、動画で内容の説明をした方がいいのではないかということで、19 ページの表紙のところに QR コードを載せていきたいと思っています。

以上です。

【荒井座長】

はい。ありがとうございます。

では、【資料 3】について、ご意見等いかがでしょうか。

【B 委員】お願いいたします。

【B 委員】

はい。

前回、私は子どもたちとのスキー合宿の帰りのバスからオンラインに入らせていただいたので、前回ご説明あったのかもしれませんが重複していたらすみません。

21 ページの下絵を見てほっとしたんです。

一人ひとりに合った学び方や過ごし方ができますという例があって、こういうことなのかと。

1点確認させてください。

このAさんの場合、全部授業時間じゃないところでの登校ですよね。

マイタイムに登校して、マイタイム、マイプランタイムを過ごして14時45分に下校しています。

つまり、自分が自らやりたい探究学習とか、そういうことを自分のペースでやって帰っても、この学校の課程を修了できるということでもいいんですよねという確認です。

そういうのも全部ありだったんだということちょっと気持ちがほっとしたところがありまして、確認だけさせていただければと思います。

それと、例にはないですが、例えば全部授業型で17時15分に登校して20時30分に下校するという、3、4、5、6時間目の授業まで出て帰るみたいなことも含め、自分なりのプランということでどういう組み方をしても、この一条校の卒業になるということでもいいんでしょうか。

あまりそこ（卒業）にこだわらなくていいと私は思っていますが、要するにここに通ってくるということは、自分でプログラムしていいということで私の理解は間違っていないかということをお教えいただけたらと思います。

【荒井座長】

はい。

いかがでしょうか。

【宮本教育長】

はい。

【B委員】が言う通りです。

【荒井座長】

ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。

では、【D委員】お願いします。

【D委員】

はい。

最初のページといいますか、この表紙に、「この学校のドアはみなさんに開かれています。」という本当に素敵なメッセージと、開いたドアのイラストがあります。

先ほどからしつこいようですが、落ちる子がいるかも知れないという現実があるときに、「みなさんに開かれています」と書いてあるけど、31人目が落ちるということがものすごく衝撃で、落胆を生むのではないかと思います。「開かれています」と言い切っているのかというところがすごく悩みます。

「開かれているんだけど落ちます」というのは書けませんが、落ちるという概念が公立学校の場合、通常はないわけなんです。

けど、今回は定員があるため、実質的に落ちることになっています。

これは全国の成功事例として、学びの多様化学校というものが多額のお金をかけてできていて、通常の学校とは違い、特別なプログラムが用意されていて、教員配置も通常より多いという状況で作られており、そういったものが成功事例となって謳われることで、抜け落ちている子たちに失望を読んでいるという現実がやはりあると思うのです。

そうであるとするならば、「みなさんに開かれています」というメッセージが 31 人目の人たちを辛くしないように、ここに書ききらず、違う言い方が何か考えられないかなと思っています。

私は反対ではなくて、軽井沢オープンドアスクールができることはとても価値のあることだと思っているからこそ、やはり誤解を生まない、失望がないという配慮が必要かなと思います。

【荒井座長】

貴重なご意見ありがとうございます。
いかがでしょうか。

【宮本教育長】

オープンドアスクールですので、開かれていると書かないといけないというのがあります。確かに、31 人目はあるのですが、落ちる子どもを最小限にすることも考えて、基本的に学びの多様化学校は町の子どもたちを対象にするというのを原則としています。

ですので、他のところに開かない（広域化をまずはしない）と言っているのは、そういう側面もあります。

広域化すること自体がいいことかどうかという部分も含めて、子どもたちの状況とかを見ながら考えていきたいと思っています。

【D委員】

先ほどの説明でも、広域化はされないということでしたが、私もいいと思います。軽井沢町の子たちのための場であり、優先するんだと言う強い意志を感じるのです。

校内教育支援センターができているということなので、そこで救えているのかもしれませんが、やはり 20 人程度は来られない子たちがいる。

軽井沢町の場合は、（不登校生徒）50 人のうちの 30 人なので良いですが、何百人も不登校がいる地域に学びの多様化学校ができると必ずそういう話を聞くんです。メディアに取り上げられるので。

なので、絶望を生まないように、メッセージだけは配慮が欲しいなと思います。

【荒井座長】

ありがとうございました。
デザインについては、まだ変更があるかと思っています。
ぜひ、ご検討ください。

それでは、【G委員】お願いします。

【G委員】

私は、オープンドアスクールという名前がとても良いと思います。
最初に聞いたときに、ネーミングがすごいと思いました。

ドラえもんを連想したんです。どこでもドアを。

子どもたちが、軽井沢オープンドアスクールと聞いたときに、やはり私と同じように、ドラえもんのどこでもドアを連想するのではないかと思うんです。

そうやって親しみを持つのではないかと。

既存の学校もオープンドアスクールになればいいと思います。ここだけじゃなくて。

だから本当にこのネーミングが良くて、いろいろご意見がある中で僕は、教育委員会も含めて軽井沢全部がオープンに、オープンドアになればいいと思います。

提案なんですけど、せっかくドラえもんを連想するネーミングなのであれば、ドラえもんのキャラクターを使えないかなと思うんです。

小学館が著作権を持っていると思いますが。

交渉しても面白いのではないかと僕は思います。

そんなの無理だと思ったらそこで終わってしまうんですが、やってみるというチャンスが僕はあると思います。

ぜひそうやって、これを見たときに小学生たちが「面白いな、パンフレットの中を見てもいいかな」と思えるような工夫を、ぜひお願いしたいなと思います。

【荒井座長】

はい。ありがとうございます。

その他にはいかがでしょうか。

では【資料3】についてはここまでとさせていただきます。

また、ブラッシュアップして、表現の仕方やフレーズについてはご意見をいただき了承を得て印刷していく形を取ろうと思っていますので、よろしくお願いいたします。

(3) は、これで区切りをつけさせていただきたいと思います。

●（４）これまでの軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議の総括

【荒井座長】

続きまして、（４）これまでの軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議の総括ということで、一言ずついただきたいと思います。
よろしくお願いします。

【上原委員】

はい。軽井沢高校校長の上原です。
7回の会議に参加させていただきまして、ありがとうございました。

まずは、来年1年間の準備期間を経て開校するというので、どんな学校になるのか非常に楽しみにしています。

学校に来られない子どもたちが来られるような学校を、軽井沢オープンドアスクールとしてぜひ開校していただきたいというのと、そういう子どもたちとそれから保護者をぜひ、地域や町など全体で支えていただきたいですし、支えていきたい、そういう学校にしてほしいと思っています。

また、軽井沢高校に設置することが決まったということで、高校とのこまめな連携や情報共有をこれからお願いさせていただきたいと思います。

19 ページにオープンドアスクールの学校案内がありますけれども、学校に行けない子は決して暗い子どもたちではないと思いますので、もっと現代風に明るく、これ見たら行ってみたいと思えるような学校案内を作成していただきたいと思いました。

あと日課につきまして、21 ページに出ていますが、1、2時間目が終わった後の休憩時間が20分しかありません。

こういった余白がとても大事で、先生方や生徒さんの会話になったりとか、色々に使えると思いますので、できればマイタイムを短くしてでも休憩時間を少し長くとっていただけると子どものクールダウンの時間にもなりますし、リラックスタイムにもなりますので、検討の余地があるようでしたらそこら辺をお願いしたいと思います。

楽しみにしておりますし、軽井沢高校としてもできることは協力させていただきたいと思います。
よろしくお願いいたします。

【山崎委員】

軽井沢中学校の山崎伸一と申します。
1年間、大変ありがとうございました。

既存の公立学校がより魅力的な場となるように、ぜひ今年1年間で学んだオープンドアスクールの理念とか仕組みとか、いわゆる学校の当たり前を壊すところを、職員に浸透させていきたいと思っています。

そういうことを通じて、軽井沢中学校と軽井沢オープンドアスクールが繋がってくるのではないかと考えております。

職員研修に関してのお話がありましたが、軽井沢中学校に現在いる職員でも、来年そのままスライドして軽井沢オープンドアスクールへ行くことは可能かと思います。

そういった意識の高い職員も中にはいますので、そういう人たちを今少しずつ育てていくということも1つ考えとしてあると思います。

また県教育委員会ともタッグを組みながら、より良い人材を集めていきたいなというふうに思っております。

ここだけの話なんですけど、佐久校長会の中でも、軽井沢オープンドアスクールができるということとある県から講師として長野県に来たんだと言っている先生がいるという情報も入ってきています。

全国的に、軽井沢オープンドアスクールがすごく注目されているのだと思いますので、そういった人材を長野県だけではなくて全国から募集できるような体制も作っていただけたらと思います。

1年間大変ありがとうございました。

【久保委員】

軽井沢西部小校長の久保と申します。

1年間関わらせていただきました。

先ほど、外部との接点という話がありましたが、普段学校という現場の渦中にあるとなかなか気づけない部分というのを、この1年間、委員の皆様からのお話からでも気づけたかなと思います。

例えばアンケートの中でも、人前で叱ることが嫌だとか、自分のペースで学びたいとか、私達の中では何となくわかっていたようでわからなかったことを改めて示されると、ハッとするというか、そういった場面というのをすごく感じられた1年だったかなと思います。

その中で、子どもたちの居場所というのを考えたときに、来年度どういう学校にしていこうかということをいろいろ考えています。

本日、本校では6年生を送る会を行っています。

本校、入学式は6年生が1年生と手を繋いで入場してくるんですが、今日はその逆で、1年生が6年生と手を繋いで整列して入ってくるということをやり、会の中身も5年生が全て自分たちで考えて、別れを惜しむということをやるのです。

今日見ていて思ったのは、とても良い空間で、色々なお子さんがいるんですがそういった子たちが生き生きとしていて、1年生から6年生のすべての子が位置づけられながら会が終わったのかなということを思っていました。

方向性といいますか、そんなのを感じた日になりました。

最後ですが、松組竹組に関わって、今日のこの会議には間に合わなかったのですが、6年生が動画に撮ってご紹介というか、発信ができればいいなということで準備をしておりますので、動画ができましたら事務局を通して伝えていきたいということは考えております。

ありがとうございました。

【諸星委員】

こんぺいとうの会の諸星です。

私はNPOの代表でもありながら、当事者の母でもあって、皆さんがこの1年間、こんなにも不登校の子に対していろいろ考えてくださったことがすごく嬉しかったです。

私が実際に悩んでいることについて、皆さんも同じ気持ちでいてくれたことに、すごい共感できたりしました。

ただ、これから先このオープンドアスクールに通うのは子どもたちなので、やはり子どもたちの気持ちを1番に考えてほしいと思っています。

大人の目線も大事ですけど、通う子どもたちの気持ちをやはり大事にしないで、子どもたちをどうしたら1番にできるのかというのを考えていただきたいと思います。

ありがとうございました。

【岩崎委員】

NPO法人国際多文化教育推進協会の岩崎と申します。

このように1年間、教育分野でのベテランの方々と過ごさせていただいて、非常に勉強になりました。

私は人生の半分以上海外におりましたので、実はこの日本の教育に対して私が言う意見は外れているかなというところがあり、押さえながら参加させていただきました。

ミャンマーで、多言語・多文化教育ができる学校を、幼稚園から中学校まで創設してきました、校長も務めさせていただきました。

まだ20年しか経っておりませんが、現在も続いています。

その中で、子どもたちというのは「人」というものをとても大事にしているところがあって、先生との出会いであったりとか、友達との出会い、人との繋がりとか地域の方々との出会いで、すごく伸びたりします。

また逆に、人との出会いが裏目に出て疑心暗鬼となって、学校に行けなくなるということもあるので、ぜひとも人との繋がりが上手にできるような軽井沢オープンドアスクールであってほしいと思っています。

また、【資料2-6】にあります、「とことんクエストタイム」や「ヒューマンタイム」、「ネイチャータイム」、「表現タイム」はとても素晴らしいと思うので、ぜひとも普通の中学校の方でも同じような教育ができる環境を作っていただきたいと思います。

先ほど今村委員もおっしゃったように、31人目になられた方はもしかしたらこういう教育があるから行ってみたいという子かもしれないので、既存の中学校もオープンドアスクールと似たような学校になってほしいと思いました。

まだ、これから開校まで時間があると思いますが、こうやって皆さんと過ごさせていただきまして、本当にありがとうございました。

【県義務教育課 唐沢主幹指導主事】

長野県教育委員会義務教育課長の代理で出席をさせていただきます、唐沢と申します。

今日は代理なのですが、課長が出席しているときもいつも参加させていただいて、毎回来させていただきました。

本日もそうですが、委員の皆様がそれぞれの立場やお考えで発言をされて、それに対し宮本

教育長をはじめ軽井沢町教育委員会の方々が答えていくという姿に、私自身本当に感動しています。

冒頭、宮本教育長が『『私たちの学校』づくり』という話をされましたが、まさにこの会議が『『私たちの学校』づくり』だったかなと思いますし、対話による学校の作り方というものを学ばせていただいたなと感じております。

毎回、ここに来させていただくのが楽しみで、楽しんで参加をさせていただきました。本当に、感謝申しあげたいと思います。

途中で教職員が大事というお話もしていただきましたが、私ども義務教育課として、令和9年の開校に向けて人事異動も来年ありますので、そこに向けてこれからも町の皆さんと連携しながら進めてさせていただければと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

【県心の支援課 臼田主任指導主事】

長野県教育委員会心の支援課の臼田と申します。

課長の向井に代わりまして、毎回出席をさせていただきました。

まず、COCOLOプラン（誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策）で、（学びの多様化学校を）全国の各県に1校（ずつ設置）ということを目指している中で、軽井沢町の皆さんがこうして第1号の学校設立のために尽力していただいているということに、本当に感謝申しあげたいと思っております。

本当にありがとうございます。

私は上田市の方（（仮称）上田市オープンドアスクール）にも関わらせていただいています。町の子どもたちにはしっかりと眼差しを向けて、一つ一つ丁寧に作りあげていこうとしているその姿勢というものが、こういうオープンな場だけではなくて、裏の方でもたくさんあると感じています。

子どもたちの気づかないところだとは思いますが、こういった歩みが先生たちに届いていくということを期待していきたいなと思っております。

私は立場上、色々な小中学校を回らせていただくことがあるのですが、自分の癖として、自分がこの学校にいたら何をしているかということを考えています。

もちろん軽井沢オープンドアスクールに自分がいたら何をしようかということもイメージしながらいます。

先日、由比ガ浜中学校（鎌倉市立の学びの多様化学校）に行ったのですが、先生たちがすごく誇らしく立っているという印象を受けました。

子どもたちに一緒に歩いていくことでこんなにも充実するのだということを感じましたし、教師としてのやりがいとか自信というものに変わっていく姿を見ました。

これが本当に行われていけば、どんどん先生たちも変わっていくのだろうと思いますし、これからもそんな期待をもって関わらせていただきたいなと思っております。

ありがとうございました。

【岡田委員】

ありがとうございます。

私は学びの多様化学校マイスターも拝命していきまして、以前マイスター同士で話し合ったことがあります。

全国 300 校を目標に、文部科学省が学びの多様化学校を作ろうとしていますが、そのマイスター同士の話で、将来的には全ての学校が学びの多様化学校のようになればいいという話をしていたんです。

でも、現状のままではいつまでたっても地域の学校は変わりません。

だから、多様化学校が先進的な取り組みをやって、それを広げていくということが求められているのではないかと思います。

長野県では、(学びの多様化学校が) この軽井沢町にできて、上田市にも今予定されているということを伺っています。

先ほど定員オーバーの心配をされていましたが、私の知っている学びの多様化学校では、30 名定員の中で来年度の募集をかけたところ、来年度はそのままだと 33 名になるということになったんです。

その学校は、定員オーバーになった場合抽選ということになっていたんですが、抽選で漏れたときの本人や保護者の落胆は本当に計り知れないと思うのです。

だからその校長は、教育長に直談判して、3 名を受け入れたいということでお願いに行きまして、結果その 3 名は受け入れることになったのです。

そういう現状もあるのです。

先ほど申しましたように、学びたいという気持ちとか学ぶ権利というのに、市町村の境も県の境もないのです。

今長野県には 2 校の学びの多様化学校ができようとしていますが、それ以外の市町村にももっと声をかけていただいて、お互いの学びの多様化学校の連携も作っていただきたいと思いますし、交流もしながら、定員も含めて地域の中でいけるような仕組み作りをやっていただきたいなと思っています。

また、今後の県教委の働きかけにも期待したいと思っています。

これが本当の信州オープンドアスクールになっていくのではないかと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

【西野委員】

はい。

1 年間ありがとうございました、西野です。

私は、40 年間不登校の子どもたちと出会ってきて、とにかく命に関わるのだということをずっと言い続けてきました。

たかが学校、されど学校。

学校に行けないだけで命を落としていった子どもたちが数えられないほどいるのです。

私が出会った子どもでも、何人も命を落としてきました。自ら。

だから、「生まれてきてよかった。生きているって楽しい。」そう思える学校を作るのが僕の悲願です。

そういう意味で、今回、学びの多様化学校作りに関わらせていただいて、本当に感謝しています。

ただ自分として、子どもたちの命を支える取り組みに貢献できたのかというと、まだまだ心もとない感じがしています。

というのは、仕組み・形までは何となく整ってきた感じがこの1年間であると思うのですが、ここから魂を入れていく作業になると思っていて、やはり教員の変容に結び付かなかったり、子どもたちを受け入れる眼差しを共有した教員たちが広がらなかつたら、そこは子どもの居場所にも、学びの場にもならないのです。

先ほど、引地台中学校の話が出ましたが、立ち上げの中心になった小林先生（小林勇輝氏）とこの間お会いしてお話ししました。

そこで話に出たのが、やはり先生自身が変わっていくということです。

今まで一般の学校にいて、学びの多様化学校に来た先生が、目の前の子どもたちと出会って自分自身が変わっていくというそのプロセスが見事なのです。

さっき、由比ガ浜中学校の先生が誇らしげに立っていたというお話がありましたけれども、今引地台中学校で働きたいという先生がどんどん増えてきているそうなのです。

そんなふうに、「そこでやらせてくれ。学びの多様化学校で自分を試したいしもっと学びたい。自分を変えたい。」という人たちが早くから関わって研修できるシステムを、どうか県教育委員会が一步步を進めて、そういう仕組みを作っていただけたらなというふうに思いました。

今、岡田委員からも出たし、今村委員とも話していましたが、私自身第1回から気になっていたのは、マスコミに報道されたら注目されてしまうのではないかなということなのです。

教育移住で、わざわざこの学校のために軽井沢町に引っ越してくる人がいた場合、不登校者数が今の50人どころじゃなくなるのではないかなと思っています。

例えば、私は「子ども夢パーク」をやっていますが、子ども夢パークの周りに不登校児童生徒の家庭が引っ越してきているのです。フリースペースえん（子ども夢パーク内のフリースペース）に入りたくて。

あの取り組みでさえ人が移住してくるということを考えると、この取り組みがマスコミで報道されれば、30人どころではなく、溢れるのではないかなと思っています。

なので、私は第1回から抽選になるのか気にしていたのです。

ここは本気で準備して考えておかなければいけないと思います。

応募者が50人になった場合にどうするかみたいところまでを視野に入れて準備を始めた方がいいのではないかなというふうに感じています。

もう少し、この取り組みを一緒に見守らせていただけたらありがたいなと思っています。ありがとうございました。

【今村委員】

まずは事務局の皆様、本当にありがとうございました。

お疲れ様でした。

私はこの会議に参加について内堀先生（内堀教育推進アドバイザー）からメッセージをいただきまして、いい取り組みですねと言いながらしばらくお返事できませんでした。

自分の子どもが小学校6年生だったのですが、なかなか自分ごととなると難しくて、親とし

て子どもと向き合うためには本当に時間が必要でそこに苦しんでいたタイミングでもありましたし、自分の組織の運営においても非常に佳境を迎えていたので、この取り組みに参加できるかということに非常に悩みました。

悩んだ上でお引き受けさせていただいたのですが、今本当に参加させていただいてよかったなと思っていますし、感謝の気持ちでいっぱいです。

私達の組織（認定NPO法人カタリバ）では様々な取り組みをしていまして、17 個の事業があります。

外国にルーツのある子どもを応援するものとか、マイプロジェクトを応援するとかいろいろあるのですが、全ての事業に共通する考え方として子どもたちに伴走する5ステップというのを置いています。

実は、1 番初めの「ステップ1」として子どもたちに準備してあげなければいけない場は「オープンドア」というコンセプトを10年前から置いていまして、オープンドアからオーナーシップに5ステップで連れて行くというコンセプトを置いているので、すごく共通する縁みたいなものを感じて参加させていただきまして、やはり皆さんのこの対話のスタンスやあり方に感銘を受けました。

不登校に関する審議会みたいなものには散々これまで参加してきたんですけども、クローズドでやることが多いです。

東京都で、不登校の子どもたちをフリースクールに繋ぐためにフリースクールを応援する助成金を検討したり、当事者に対する支援金を出すための基準の検討をしたりと、様々な取り組みをしてきましたし、文部科学省の会議でも色々やってきましたが、冒頭だけマスコミを入れて、途中からクローズドにするというやり方をしていることが多いです。

それは、それだけ苦しんでいる方が多くいて、保護者の方々が議論を聞いたときに、行政の方の想いとは違うところで怒られるのではないかという恐怖心を行政の方が感じやすい構造にあるからだと思います。

そんな中、この今回の軽井沢町の取り組みやこの会議のあり方自体がオープンドアで、市民の方にも開いて、いろんな方々と議論して、しかもいろんな意見をあれこれ言ってもちゃんと次の回にはその回答が明快に教育長の口から語られるというあり方に、すごく「オープンドア」を感じていました。

そのあり方を知れたことが、ここに参加できてよかったと心から思えた所以ではないかと思います。

ここからが本番だと思うので、何か協力できることがあればまたお声掛けいただければと思います。

ありがとうございました。

【飯澤委員】

日本財団の飯澤です。

この1年間、本当にありがとうございました。

熱意ある委員の方々の発言や考えに触れられたことは、私にとって貴重な学びの機会であったと感じております。

年間7回ということで、ここに来て発言できる時間はわずかでしたし、貢献できたこともあまり多くはなかったかと思っています。

この間、軽井沢オープンドアスクールをきっかけに町の中でワークショップを行ったり、学校の中で子どもたちと対話する機会を設け、回数を重ねていったということをお聞きして、それはすごく価値があることだと感じています。

地域の方たち、あるいは子どもたちが学校をどうしていくかという「自分たちの学校作り」というのを、聞いて考えていくということがとても重要で価値のあることだと思っていますし、この軽井沢オープンドアスクール設置準備会議がなくなった後もその意識というのが地域の方たちに残っていくのだろうと思っています。

そういった意味では、この傍聴されている方々もわざわざ平日に足を運んでくださっているということで本当にありがたいことだと思っていますし、個人的には傍聴されている方のご意見を聞いてみたかったなと思っています。

具体的な試行錯誤というのはこれから開校するまでに行われていくのだと思いますけれども、ぜひ地域の方と一緒に続けていってほしいなと思っていますし、地域の方と歩んでいる軽井沢オープンドアスクールの取り組みというものはおそらく、他の地域・他の自治体にとっても参考になる取り組みだと思っていますので、これからを楽しみにしております。

どうもありがとうございました。

【福本委員】

株式会社SPACEの福本です。

1年間、こちらでの議論に参加させていただいて、私は現場があって半分ぐらいしか出られなかったんですけども、この議論を通じて、軽井沢に新しい学校ができていくということに希望を感じている方が、この時間の中だけでもすごく増えたのではないかと思います。

運営も含めて、ここにいさせていただいてありがとうございます。

私も、すごく多様な子どもたちに関わった異才発掘プロジェクトというものから始まりまして、それは学校を飛び出た子どもたちのためのプロジェクトだったわけですが、そこには多様な生き方や生き方で生きていた子どもたちとの出会いがあり、そういう子どもたちが学校の枠を超えても生きていられる社会とは何かということを考えながら今までやってきたところがあります。

それがこの数年で、学校自体をそうしようという議論に発展してきたこと自体が日本の大きな進歩でもあるなと思っていますし、それ自体を求めている人たちの意識がものすごく大きくなってきているという現状があるのだと思います。

少し論点は変わりますが、AIとかロボットが学校に入るみたいな議論も都内では盛んに行われるようになってきていて、そもそも私達が何のために生きているのかということに立ち戻れる機会というものが、今の時代のこの学校の学びに戻ってきたのではないかと思います。

軽井沢オープンドアスクールに入れない人たちがいる。

でも、そういう子どもたちも、社会全体、軽井沢町全体の雰囲気が変わっていくということを通じて、(軽井沢オープンドアスクールに) 入れるか入れないかというところが重要なので

はなく、どこにでも受け皿があるんだという状態に早くなっていってほしいとも思っています。

社会の中に適応することがどうしても難しい子どもたちもいるんです。

でも自然界で考えると、生物多様性で、色々な時間に起きて活動したり、色々機能を持ったり、様々に形態を変えていった動物たちがいます。

私達もやはりその1つであるという視点に立ち戻れば、軽井沢オープンダスクールで掲げている「ネイチャータイム」であったり、「ヒューマンタイム」であったり、その意味がものすごく意義深いなと思うんです。

社会で適用できなくてもちゃんと自然の中に適用できて、自然の中に適用する社会に戻っていくための1歩として、この軽井沢オープンダスクールというものを、新しい公教育としてオープンダをやっていくんだということで、未来の教育の1つの雛形としてこの学校ができていけばと思いますし、そういったところに関わられている皆さんが、それぞれ誇りを持って、熱意を持って、なおかつ大変な状況であっても楽しんでいただければいいなと思っています。

私達の命をどうやって輝かせていくのかというのは、子どもたちだけの問題ではなくて、やはり大人一人ひとりの心のあり方全てが投影されていくものだと思うので、そこを来年度も含めて、それから学校ができた後も含めて、皆さんと一緒に作っていけると素晴らしい学校が20年後30年後に出来上がっていったら、日本中に当たり前にあって誰もがオープンダスクールに入っていける状態を目指せるのではないかと思います。

そのビジョンを持ちながら、また来年度もご一緒できたら嬉しいなと思います。

1年間、どうもありがとうございました。

【西郷委員】

いつも勝手なことばかり言わせていただいていたって申し訳ない。

でも、こんなに理解のある教育委員会の皆さんがいるということが、羨ましいなと思いました。

ここで校長をやりたかったです。

そしたらもっと色々なことが楽しく、もっと色々なことができたのではないかと思います。

東京の悪口を言うわけではありませんが、隠して、教育委員会には言わないようにしてやってきたことがたくさんありました。言ったとしても必ず否定されるので。

そういうことはないわけですから、本当にいいですね。

生まれ変わったら、軽井沢町で校長をやります。

いくつか、気になることがあります。

今日も既存校の校長先生がいらっしゃいますが、最後だと思って聞いていただければと思います。

まずは、「これは伝統だから」という言いかたはやめた方がいいということです。

それからもう1つは、「子どもに聞きました」という発言で、子どもに聞かなければわからないのかと私は思うのです。

聞かなくても子どもの気持ちはわかるのではないかと思います。

毎日その子たちと一緒にいて、何でわざわざ子どもの意見を聞かなきゃいけないのかと。あれもやめた方がいいと思います。

子どもの意見を聞きましたという言い方はおかしいです。そんなのはわかって当たり前で

す。

最後の指摘だと思って聞いていただければと思います。耳痛いかもしれませんが、そんなイメージです。

一昨日、セルビア大使館の大使に会ってきました。

なぜかという、港区の小学校へ通って、いじめられて不登校になったということで、今はインターナショナルスクールに変えて通えるようになったそうですが、その人の話を聞きにいったんです。

そのセルビア大使は、日本の教育を 19 世紀の教育のように見えると言っていました。

大使は、日本に来た最初の頃に横断歩道を渡らせるために旗を持っている人がいるのを見て、セルビアと同じことをしている人がいると感じ、これなら安心して日本の学校へ通わせられると思ったそうです。

だが、とんでもなかったと。

日本語がうまく喋れないということでからかわれたりいじめられたそうです。

それ以外に、学校の対応が良くなかったとっていました。

結局、被害者がその学校をやめて他の学校に移らなければいけなかったと。

そんな話をしていました。

また、東京での話ですが、前年度 80 人の子どもが死んでいます。

その前の年は 60 人でした。

でもその裏にはもっといると思っていて、実は橋から飛び降りて亡くなった場合に事故死にしていることもあるのです。

なので、実際にはもっといて、東京都は 3 日に 1 人子どもが死んでいるという状況にあるのです。

長野県の現状は知りませんが、東京都の後を追わないようにしていただきたいと思っています。

中央の真似をしたら、同じことになると思います。

この前モンゴルの先生を（この会議に）連れてきたんですが、モンゴルに日本の学校のシステムを導入して学力中心の学校を作ったら、やはり学校が嫌いな生徒が増えてしまって、学校に行きたくないという不登校が増えたと話していました。

日本の真似をすると、外国であっても同じようなことが起こるのだと私は思いました。

だから、中央のことばかり聞かないで、軽井沢町あるいは長野県で独自の、地域に合った、子どもに合った学校での教育をしてもらえたらと思います。

でもこの会議に出席させていただいて、何か 1 つの希望を持てて、とてもいろんなものが明るくなりました。

暗いニュースばかり聞いていたので、軽井沢に来てから明るいニュースを聞けるようになって元気が出ました。

ありがとうございました。

【本田委員】

信州大学の本田です。

私は大阪出身で、大阪府豊中市というところで公立の小学校へ通っていました。

5人、担任の先生がいて、その内の2人とはいまだにLINEが繋がっています。

ことあるごとに連絡をしますし、昔の同級生と飲みに行ったりすると写真を送ろうという話になって写真を送ったりもしているんですが、その2人の先生に勉強を教わった記憶は全然ないんです。

1人はすごく趣味が多彩な方で、こういう生き方もいいなと思った先生で、もう1人は6年生のときの担任で、他校から転任してきて初めて受け持つ生徒だったんですが、初日に全員の名前と顔がわかっていたんです。

つまり、前の日に予習して全部覚えてきていたのです。

こういう人のことをプロというんだなと思っていて、尊敬しています。

学校は何のためにあるかという、大人になったときに自分はこういう人生を歩むんだというモデルになるような人と出会ったり、あるいは自分が長く付き合う友達とであったり、それから知的好奇心を満たしたりとかそういったためにあって、そういったことを学校でどれだけ得られるのかということが求められていると思うのです。

しかし今は、ものすごく不登校の方が多くて、そういう方々はその機会を奪われてしまうわけです。

だから、今回このオープンドアスクールができることによって、少なくとも子どもさんたちの知的好奇心を満たす場、それから社会との接点が作れる場が確保できる可能性が出てきたと思っています。

しかもその内容が、型通りのものではなくて、むしろ社会に出ていくことをちゃんと意識したカリキュラムになれる可能性があるということに、非常に希望が持てるなど、今回参加して感じておりました。

皆さんも心配されているように、定員の問題というのは多分あると思います。

軽井沢って、ものすごく注目されているんです。

他に住んでいて長野県に移住すると言ったら、大抵は軽井沢か佐久とかその辺なんです。

そして、そこでうまくいかなかった方たちが私のところへ来ます。

軽井沢に来たけど不登校とか、軽井沢に来たけれどやはり学校に馴染めないという方も何人か診ているんです。

そういう方々を見ていると、軽井沢という土地柄への期待の高さというものがあって、ある一定の割合では答えられているのです。

ちゃんと答えられていて、軽井沢に来てよかったとおっしゃっている方もいます。

それはそれでいいんですけども、やはり色々なニーズの方がおられるということも事実なので、オープンドアスクールは一定のニーズを満たすとは思いますが、それ以外のニーズを満たしきれない可能性ということを考えて、先ほど申しあげたように繋ぎ役というか、要は基本の学校のシステムに馴染めない、馴染みにくい人たちを社会やコミュニティで支えていくための学校側からの1つのハブ的な役割を持つものだという認識を持っていただけるといいなと思います。

学校は学校の中でやっていただくんですけど、そこだけで完結しない部分についても、目配りはできるような組織になっていただくといいなというふうに思います。

本当に期待していますので、ぜひいい形でスタートできることを願っております
ありがとうございました。

【荒井座長】

ではここで、木村委員にお願いしたいと思います。
木村委員、聞こえますでしょうか

【木村委員】

1年間ありがとうございました。
Zoom という環境で、新たな学びをいただけたという気持ちであります。
皆さま方がいろいろ語られたことを、原点に戻って振り返っていました。
今日 Zoom でなかったら、こういうことは私自身学べなかったのではないかと考えています。

このプロジェクトが発進した1番最初の原点は、学校に行けない子が、どうやったらオープンドアスクールを作ったときに行けるようになるかということだったと思います。

お世話をしてもらえるから、たくさん良いことを与えてもらえるからいけるというのは、あまりにも子どもを愚弄していますよね。

自分が学校をつくる主体者で、自分がつくる自分の学校、つまりオンリーワンはナンバーワンだということを全ての子どもが自分を軸に自己評価として育むことができれば、子どもはみんな自分が学ぶ自分の学校を、自分でつくります。

だから、この『私たちの学校』づくり」という言葉が生まれたのだと思うんです。

何人来るかわからないし、どうなるかわからないし、時間割とかはもちろん事前に示すことが大事かも知れないんですが、軽井沢オープンドアスクールをつくるのは、ここで学ぶ子どもや、その子どもの保護者、地域の人たち、ここで働く教職員で、それぞれがここで自分の学校をつくるんです。

つまり、全ての子どもと大人、総じて言えば「人」。

人が自分の学校を自分でつくって当事者になる。

当事者になれば、人のせいにしませんよね。

これが、最初のスタートだったかと、今振り返って思いました。

なので、スーツケースのようにガチッと、こんなに良い学校だからみんな安心して入りなという事は必要ないと思うんです。

緩い緩いパンフレットで、みんなで風呂敷を繫いで、「あなたはこういう学校をつくりたいの。じゃあこの風呂敷を地域と繫いでいこう」こんなことが必要なんだろうと思いました。

もう開校するまでは、今ぐらいで十分かなと思っています。

学校が、緩い緩い今の感じで開校すればいいかと。

ただ、開校してからは2つ、大きな課題があると感じました。

どんな先生がどんな環境を作るとか、こういう教室がいいとか、事前にいろんな見える形にしているんですけども、この学校を選択してくる子は学校に行けなくて苦しんでいる子どもだと思うのです。

西野さんが、命まで落とす話をされていましたが、その通りなんです。

苦しい思いをしている子は、声を出せないんです。

ということは、大人の私達は、苦しい思いをしている子どもの声を聞けないし、聞けないからこそその子の苦しさになかなか気づけない。

ですから、しんどいということを表現できない今の環境を知ることから学校をスタートしなければいけないと思うんです。

その子なりの声のあげ方ができる環境をどうやって作っていくのが大切で、これは本当に未知だと思います。

未知だからこそ、子どもの声をいかに聞かしてもらえる私達になるかということが1つ目です。

もう1つは、厳しい表現になるかもしれないのですが、軽井沢オープンダスクールは地域の中学校から子どもを分断することになると思うのです。

ですから、絶対に軽井沢オープンダスクールを特別な学校にしたらいけないと思います。

今日、校長先生も教頭先生もいらっしゃるかと思いますが、軽井沢中学校の子どもたちと、軽井沢オープンダスクールの子どもたちをいかに繋ぐかということが、軽井沢中学校のこれからの大きな課題だと思います。

地域で生きていく子どもたちは、子ども同士の関係性の中で育ちあって、未来を創る大人になると思うので、ぜひ意識していただきたいと思います。

今日はとても良い学びをいただきました。

皆さん、本当に1年間ありがとうございました。

【荒井座長】

ありがとうございました。

では、三和委員、お願いいたします。

【三和委員】

はい。三和です。

1年間ありがとうございました。

私は、形だけの副座長だったんですが、色々な方とお話できて、長野県の教育はもっと面白くなると、わくわくしながら参加させていただきました。

私は普段、S a S a LAND（ササランド）という長野市の教育支援センターへ関わっているのですが、先日保護者の方へインタビューさせていただいて、印象に残っていることがあります。

「僕に優しいと褒められたことがすごく嬉しかった」という保護者がいました。

その子は結構多動な子で、学校でなかなか活躍できなくて、普段はこれができないあれができないという話をされていて、褒められる時も、これができたあれが上手だったみたいに行動ばかり褒められたりしていたそうです。

これまで内面を見ていただいたことがあまりなかったので、優しいと言われたのがすごく嬉しかったとその保護者の方は言っていました。

それが結構、私は印象に残っていて、やはりどうしても不適合を起こしてしまう子どもは内

面を見てもらえないのではないかと感じましたので、ぜひ軽井沢オープンダスクールでは内面が見られるような、そんな施設になればいいなと思っています。

あとは保護者の方と関わる中で、やはり保護者支援がすごく大事だと改めて感じたので、ぜひ子どもだけではなく、保護者の方の支援体制も考えていただきたいと思います。

また、大学との交流ということで、信州大学は長野県の大学ですので一緒に交流しながら何か作れたらというふうに思っています。

子どもにとってもプラスになると思いますし、信州大学の学生もそういう経験をすることによって将来オープンダスクールで働きたいというような意識の高い学生も生まれてくると思いますので、可能であれば連携も今後していきたいと思っています。

これからスタートになりますので、私も一緒に関わりながらやらせてください。
引き続きお願いします。

【荒井座長】

はい、ありがとうございます。

最後に私から一言コメントさせていただきます。

毎回メモをとっているのですが、第1回のときにお話したことを少し振り返りながらお話ししたいと思います。

オープンダスクールという議論は、初めは長野県教育委員会の方で始まり、議論した結果出てきた答えはシンプルなものでした。つまり、インクルーシブでフレキシブルな場づくりを進めていくというものです。

初回に皆さんからいただいたご意見の中で印象に残っているものは、学校教育、学びというものを再定義しなければいけないという危機感です。

現状認識としては非常に厳しいものからスタートしたという記憶があります。

それに対して、1年間でありましたけれども、子どもたちや教職員アンケートを行ったり、既存の学校も同時に変わっていく必要があるということで、ワークショップ等、皆さんにもご参加いただきました。

先ほどお話にも出ましたが、軽井沢町では「表現コミュニケーション」の実践があるなど、様々な方々と協働で物事を創り上げていく文化が醸成されつつあるということですので、楽しみにしています。

ところで、傍聴いただいている方にはリピーターがとても多いと認識しております。

ぜひその方々とも思いを重ね合わせてまいりたいと思いますので、引き続きコミュニケーションをお願いいたします。

改めて、拙い司会にお付き合いいただきありがとうございました。

では事務局の方にお戻ししたいと思います。

●（５）その他

【岩井こども教育課長】

荒井座長、委員の皆様、ありがとうございました。

（５）その他について、事務局より説明させていただきます。

【金井軽井沢高校・教育魅力化推進係長】

それでは説明いたします。

２点、説明させていただきたいと思います。

まず来年度、令和８年度の設備準備会議についてです。

本来でしたら日程案を事務局から提出すべきですが、今回の第７回会議に全力投球しすぎまして、そこまで手が回りませんでした。

大至急、日程調整を進めていきたいと思いますので、また委員の皆様には別途日程候補も含めてご案内させていただければと思います。

冒頭で教育長より説明がありましたが、２回程度ということで秋と翌年の冬ごろを目安に予定していきたいと思います。

２点目です。

『私たちの学校』づくり」軽井沢フォーラム 2026 についてです。

こちらは日時確定となりまして、令和８年７月 12 日（日）14 時から 17 時です。

場所は軽井沢町中央公民館で行いたいと思います。

詳細や委員の皆様の出欠席については、別途メールで確認させていただければと思っております。

以上、事務局からの説明になります。

●５．その他

【岩井こども教育課長】

その他、何か委員の皆様からよろしいでしょうか。

それでは、本日も事務局から提出させていただきました多くの議題に関しまして、荒井座長始め、全員の委員の皆様から貴重なご意見、ご提言等をいただきまして誠にありがとうございます。

皆様よりいただきました意見を事務局としても肝に銘じ、『私たちの学校』づくりということで、オープンドアスクールも既存の学校も含めて、子どもたちを中心に考えていきたいと思いますので、引き続き皆様のご協力をいただきますようよろしくお願いいたします。

●６．閉 会

【岩井こども教育課長】

以上をもちまして、第７回軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議を終了いたします。

本日はありがとうございました。